

児童の家庭生活認識の実態

— フィルム視聴後の意識調査 —

清水 房*

(1986年6月30日受理)

はじめに

児童・生徒の家庭生活認識の発達に関する研究は、日本家庭科教育学会が中心となって昭和56年から始められている。それに先立って各地区で予備的研究が進められ、岩崎恭枝等の研究¹⁾もその1つであるし、東北地区としても独自の調査を行うなどこの主題に向けて各県で研究の開発が行われ現在に及んでいる。

こうした家庭生活認識の発達研究の理論構成に一石を投じた論文に宮川満氏の「家庭科における家庭生活認識」²⁾があり、この中の発達段階区分の移行過程に着目して金田利子等の報告³⁾がある。

一方、昭和59年12月19日には家庭科教育に関する検討会議**から「今後の家庭科教育の在り方について」(報告)が出されている。また、教育系大学及び学部組織である教大協第二部会家庭科部門第31回総会(神戸大)において本教科の課題をつぎの二つに整理した。即ち、一つは、男女共修問題であり、他の1つは低年令化問題である。

以上家庭科教育をめぐる内外の諸状況から考え、基本的な課題は、児童観の確立であると押えて、本報告は、家庭科教育の低年令化問題の解決に向けて、その実証的資料を得ることを目的として行った研究である。

1. 研究の方法と経過

(1) 研究仮説

仮説〔1〕小学校低学年から高学年に向けて、身心の発達から来る家庭生活認識のちがいがどのような実態であるか。特に9才の壁と言われる中学年段階が、移行過程として重要な意味を持ち、家庭科の低年令化への基礎資料となる。

仮説〔2〕男女によるちがいは、学年が進むにつれて開きが大きくなる面と小さくなる面がある。家庭科の指導内容や方法の改善に資することができる。特に成熟年令の早期化を迎えた現代のこども像の中には、高学年から中学年に早めた時期で指導を必要とする事項がある。

仮説〔3〕核家族化が鈍化する中でこのこどもの家庭生活認識が捉えられる。事実認識には差がある。家族関係内容の低年令化に役立つ。

* 岩手大学教育学部

** 教育課程審議会の諮問機関

仮説〔4〕母の就労の有無によって、行動や役割面の認識にちがいが出る。母就労の児童に積極的な面がある。

（2）フィルム選定

フィルムの選定については慎重を期し、つぎのような条件を満す内容のものとした。

条件〔1〕貸出し可能なもの。

条件〔2〕時間は30分内外のもの。

条件〔3〕生活場面が衣・食・住にわたって具体的に表現されているもの。

条件〔4〕登場人物の中に小学生のいる事。

選定したフィルムは、北星株式会社配給の16ミリフィルム「お母さんが走った」カラー34分のものである。

なお、借用先は、岩手県教育委員会視聴覚ライブラリーで、10数本の試写を行った中から選定し、長期間の貸出しを許可して頂いた。

—あらすじ—

靖子たちの家は、熊本県南部の静かな内海に面した小さな漁村の小高い所にある。靖子は、哲也（小5）とみさき（小2）の母親で、看護助手をしながら勉強し、今は重症身心障害児の施設に勤務し、その仕事に生き甲斐を感じている。夫の浩太は漁師で、年老いた父の作造と舟を操ってえびや魚をとっている。哲也とみさきの面倒をみているのは母の房子。孫2人を目の中に入れてもいたくない程かわいがっているが、その上、共働きをしている長女夫婦の赤ん坊まで預って張り切っている。

房子と靖子は子どもの育て方のことで時折衝突する。靖子は房子に感謝をしてはいるものの甘やかしすぎるのが気に入らないし、房子にとっては靖子の厳しいしつけが気に入らない。

そんな時、哲也が房子から小使い以外のお金をもらって買い食いをしたり、無断でタンスの上のお金を持ち出して野球のグローブを買ったり、自分で起きられるようにと買ってやった目覚時計が鳴っても寝すごして学校に遅刻するなどという事件が持ちあがった。こんな時に、靖子は人に頼らない子に育てるには厳しいしつけが必要だと主張し、浩太は親が一生懸命に働いていれば子供は真直ぐに育つし、家庭の中に波風は立てたくないという。また房子は、母親は家において子どもを育てなければいけないし、厳しすぎでは子どもが可愛想だ、自分のしつけ方が気に入らなければ動めをやめて自分で面倒をみなさいと靖子にいう。

哲也だけでなく、みさきも問題を起こした。みさきは散らかした子ども部屋を片付けるようにと靖子に言われていながらそれをせず、そのためにみさきの大事にしていたぬいぐるみをどこかに持っていかれたが、そのことに腹をたて房子の大切な鉢植の花をむしり取った。そして房子と浩太にひどく叱られたみさきは、家を飛びだした。

房子、浩太、哲也は八方探し回ったがどこにもみつからない。みさきはとりつくところがなく、母の学園に行ったのだった。みさきは学園の窓越しに、病棟で重症児を看護する働く母の姿と、ウサギのぬいぐるみを見た。みさきは母に発見され、学園の医師上野先生から身体の動かない病気の子供たちは、お母さんと別れていても泣くことがないことや、みさきの母が大切な仕事をしていることを聞かされ、自分のわがままに気づいた。

この事件のあと房子は「精一杯やっても母親の代りはできない、仕事をやめることが子供のためだ」と強いう。靖子はショックを受けながらも、学園の子どもたちに辛くても途中で止めてはいけないということを教えられたと話し、さらに使命感を強め、学園にバザーがあるので見に来てほしいと言う。

学園のバザーの日、元気に運動する身障児とかいがいしく働く母や職員の姿を見た房子や哲也、

みさきは深い感動をうけた。そしてみさきは「私も看護婦さんになる」といい房子もそれにうなづくのだった。房子と靖子が晴々とした顔で連れだってPTAの集りに出かけたのは、その翌日のことだった。

(3) 設問の構成

- 設問1** 家族の間柄の図を示して、親子・きょうだい・夫婦・いとこ・おじとおいめい・祖母と孫などの関係について問う。
- 設問2** 役割行動認識について、祖母が孫にこずかいを母親にだまてやった事に対する考え方を問う。
- 設問3** 食事の後片づけを誰がするかについて、家族の一員としてのあり方意識を問う。
- 設問4** 親の子に対する役割について、子どもの立場でどうみるかを問う。価値認識と情緒的認識（好き嫌い）との関係をみる。
- 設問5** ほころびたシャツを着ている父親のスケッチを入れて場面を想起させた上で、それへの対応のしかたを問う。
- 設問6** 朝ねぼうして食事しないで登校した場面から、食行動意識をさぐる設問。
- 設問7** 部屋のせいり整頓を手がかりに、自律的行動に対するこども自身の実態をみる。
- 設問8** 親と子の間柄を、親の言いつけを守らなかった時の親の対応（人形をかくす）のしかたからどのような価値判断の比重で移行するかを見ようとした設問。

(4) 予備調査

対象 岩手大学教育学部附属小学校第1学年から第6学年まで63名。内訳は下表のとおりである。選出は学校側の任意抽出による。

学年 男女別	1	2	3	4	5	6	計
男子人	5	5	5	5	5	6	31
女子人	5	5	5	6	5	6	32
計人	10	10	10	11	10	12	63

期日 昭和60年8月24日（土）

場所 岩手大学教育学部附属小学校視聴覚室。

低学年で若干飽きたような様子が散見されたほかは全体的によく視聴していた。視聴後の調査は2年生以上は、自力で回答。1年生にだけは読み聞かせながら記入させた。

なお、家庭環境については別紙に記入させた。

結果の処理 予備調査結果によって調査対象と項目の検討を行ない本調査に備えた。

- ①調査対象から第1学年は割愛する。
- ②設問1については、「めい」を「いとこ」と劇中の小学生の立場との関係を表現することばに変更。難易度を考慮して○と×の項目を多少変えた。図示も設問に影響を来たさない程度に図示することで解り易くした。
- 設問2 そのまま使用。
- 設問3 そのまま使用。
- 設問4 ②と③の選択肢ウ「どちらでもない。」を「どちらともいえない」とする。

設問5 そのまま使用。

設問6 理由は自由記述とする。

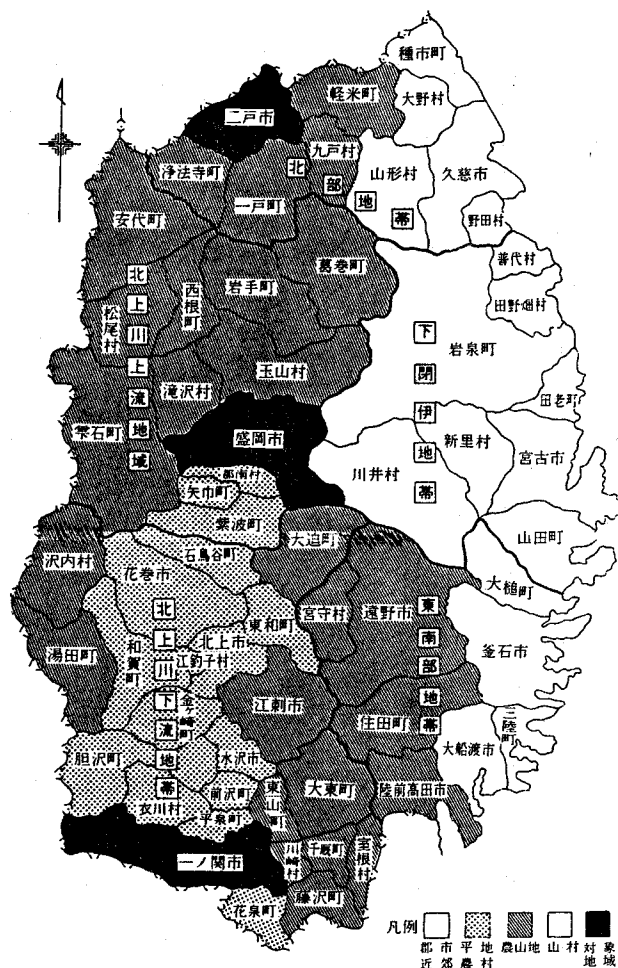
設問7 「かたづける」の理由と「かたづけけないの理由」がバランスとれるように、選択肢を1つ増やすこととする。

設問8 そのまま使用。

以上設問1, 4, 6, 7, について改善を加え, 本調査の項目を設定して実施に移した。

(5) 本調査

対象	盛岡市立緑ヶ丘小学校	391名
	盛岡市立城南小学校	188名
	一ノ関市立一ノ関小学校	99名
	二戸市立福岡小学校	590名
	計	1,268名



第1図 調査対象地域

地域の選定は、県北、中央、県南、とし、盛岡市は純都市部、一ノ関と二戸は県北と県南の近郊農山村地帯から抽出した。(第1図)

調査対象者の数の学年別内訳と属性別人数の一覧は第1表のとおりである。(第1表参照)

第1表 調査対象者の数と属性(人)

学 年	男	女	計	属 性						
				母就業	母無職	計	三世代	核	その他	計
2	119	125	244	138	106	244	59	179	6	244
3	112	125	237	123	114	237	75	156	6	237
4	135	124	259	139	120	259	65	186	8	259
5	127	120	247	144	103	247	53	171	23	247
6	140	141	281	187	94	281	74	194	13	281
計	633	635	1,268	731	537	1,268	326	886	56	1,268
(%)	(49.9)	(50.1)	(100)	(57.6)	(42.4)	(100)	(25.7)	(69.9)	(4.4)	(100)

期日 学校別実施期日は下記のとおりである。

緑ヶ丘小学校 昭和60年11月27日(水)

福 岡小学校 昭和60年12月2日(月)

城 南小学校 昭和60年12月5日(木)

一ノ関小学校 昭和60年12月14日(土)

フィルム視聴前の説明指示は、研究者側で行ない、調査票記入については各クラス担任の協力によった。

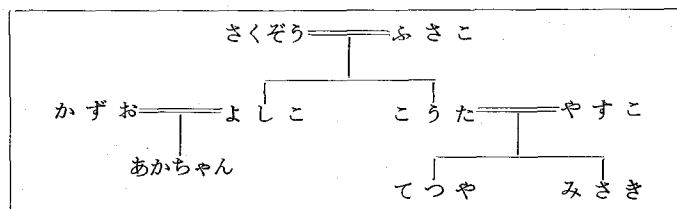
設問 末尾参考資料参照。

2. 結果と考察

(1) 家族の間柄の事実認識

設問1

下の図を見て、次を書いてある文が、正しかったら○、まちがっていたら×をつけてください。



第2図 ○△ (○と△はふうふ。□は○と△の子どもで)
あることを表す。

- ア) みさきさんとあかちゃんは、きょうだいです。
 イ) てつやくんは、やすこさんの子どもです。
 ウ) こうたさんと、やすこさんはきょうだいです。
 エ) みさきさんは、ふさこさんのまごです。
 オ) あかちゃんは、てつやくんのいとこです。
 カ) さくぞうさんは、かずおさんのおじさんです。
 キ) こうたさんは、あかちゃんのおじさんです。

小問ごとの学年別正答者数と正答率は、第2表に示すとおりである。学年別では、学年進行に伴ない上昇の傾向は明らかであるが、中には、カ)「さくぞうはかずおのおじ」キ)「こうたはあかちゃんのおじ」のように3, 4年より2年が高い正答率を示す小問もある。これは、調査時の指示のしかた(クラス担任によった)のちがいによったものと思われる。

第2表 生活事実(家族の間柄)認識の実態

項目 性別 学年	ア		イ		ウ		エ		オ		カ		キ		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
2	(人)	106	118	96	112	99	109	97	115	94	113	86	97	80	93
	(%)	89.0	94.4	80.7	89.6	83.2	82.2	81.5	92.0	79.0	90.4	71.0	77.6	67.2	74.4
3	(人)	103	117	100	114	98	111	92	109	84	110	43	71	70	80
	(%)	91.9	93.6	89.3	91.2	87.5	88.8	82.1	87.2	75.0	88.0	38.4	56.8	62.5	64.0
4	(人)	128	121	123	118	111	112	100	110	98	111	71	87	79	90
	(%)	94.8	97.8	91.1	95.2	82.2	90.3	74.0	89.5	72.6	89.5	52.6	70.2	58.5	72.6
5	(人)	118	118	121	116	115	110	105	113	98	108	68	89	86	90
	(%)	93.0	98.3	95.3	96.7	90.6	91.7	82.6	94.2	77.1	90.0	53.6	74.2	67.7	75.0
6	(人)	129	138	127	133	129	134	131	131	114	131	82	113	107	123
	(%)	92.1	97.9	90.8	94.3	92.1	95.0	93.6	92.9	81.5	92.9	58.5	80.2	76.5	87.2
全 体	(人)	584	612	567	593	552	576	525	578	488	573	350	457	422	476
	(%)	92.2	96.4	89.6	93.4	87.2	90.7	83.0	91.1	77.1	90.3	55.3	72.0	66.6	75.0

男女別にみると、すべての小問において女子の正答率が高くなっており、特にオ)「赤ちゃんはてつやくんのいとこ」カ)「さくぞうはかずおのおじ」の二小問の開きが大きい。標準偏差を求めてみると、3年から6年までは、学年進行に伴って値が大きくなる傾向を示している。これは、高学年になる程個人差も大なることを表わしている。

家族構成別にみると、兄弟・親子関係など近い間柄においては核家族で生活している者がよい結果であり、従兄関係、叔父・おい関係など、少し離れた関係の認識は、三世帯家族で生活している者の方が、高い正答率を示す傾向が見受けられた。このことは、重世帯家族で生活していることによって、親戚づきあいも拡大され、離れた関係の人達との接触も多くなることに

よったものと思われる。

(2) 衣・食・住の行動認識

衣生活 設問5によって考察する。

設問5

お父さんが、少しほころびたシャツをそのまま着ているところがありました。このことについてあなたはどのように思いますか。次の中から1つ選んで○をつけてください。

ア) 上に服を着てしまえば、ほころびているのはわからなくなるから、ほころびたままでよいと思います。

イ) ほころびていても着ることはできるから、ほころびたままでよいと思います。

ウ) ほころびてしまったのだから、それをすてて新しいシャツを買えばよいと思います。

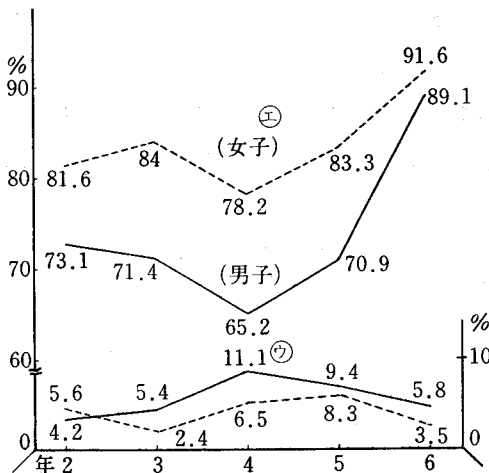
エ) ほころびたままではいけないから、すぐになおせばよいと思います。

オ) その他()

ここでは小問1つ1つについてというよりエ)の「すぐ直せばよい」と、それに対する意識として「捨てて買えばよい」を取り上げて考察をする。

現行の小学校家庭科学習指導要領では、第6学年の内容に、「簡単なほころびなどを直すことができるようにする」とあることに関連して、エ)の設問への反応を取り上げ、一方において、その対立意識として着捨ての時代と言われる現代社会の衣に対する考え方が、どのように反映しているかをみると、(第3図参照)学年進行では、3・4年に屈折があり、1時期一旦疎外された意識が反作用によってその後5年6年と順調な上昇傾向を辿って、移行するものと考察される。

ウ) ほころびてしまったのだからそれをすてて新しいシャツを買えばよい
エ) ほころびたままではいけないからすぐに直せばよい



第3図 衣生活行動認識(ほころび直し)

男女差は学年が進むにつれて減少傾向を示し、特に「すぐ直せばよい」に反応した男児は5年から6年にかけて急に増加している。この実態は、家庭科学習の効果によるものと考察される。また、このような意識を持つ児童に実技テスト——ポケットロのほころび直し——を試みた結果がある。⁴⁾それによると、頭ではどのような縫い方で直せばよいかは解っているが、技能が伴わない為に実践化できないという実態が明らかにされている。

食生活 設問6によって考察する。

設問6

①てつやくんとみさきさんが朝ねぼうして、朝ごはんを食べないで学校に行くところがありました。このことについて、もしあなただったらどうしたと思いますか。1つ選んで○をつけて下さい。

ア) 食べて行く。

イ) 食べないで行く。

②それはどうしてですか。

()

③朝ごはんを食べないことについて、ふだんあなた自身はどう考えていますか。

()

①でア) 食べて行くと回答したのは全体で65.6%あり、学年進行に伴ってなだらかな上昇傾向を示している。(第3表参照)

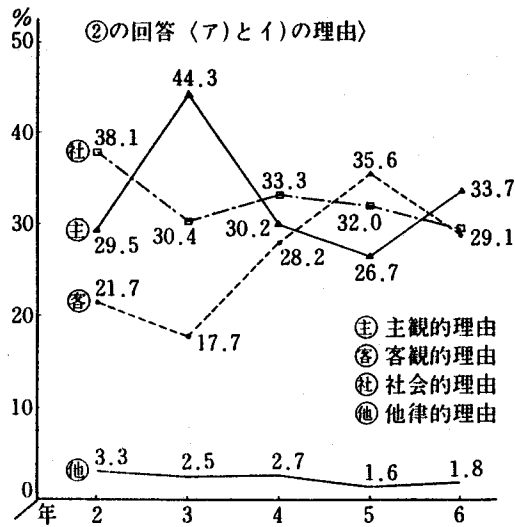
第3表 食生活行動の実態

学 年 性 別 項 目	2		3		4		5		6		合 計		%
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
食べて行く	68人	75人	72人	83人	88人	85人	87人	74人	111人	88人	426人	405人	65.6
食べないで行く	50	50	39	42	47	39	39	46	29	53	204	230	34.2
N. A	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0.2
小 計	119	125	112	125	135	124	127	120	140	141	633	635	
合 計	244		237		259		247		281		1,268		100.0

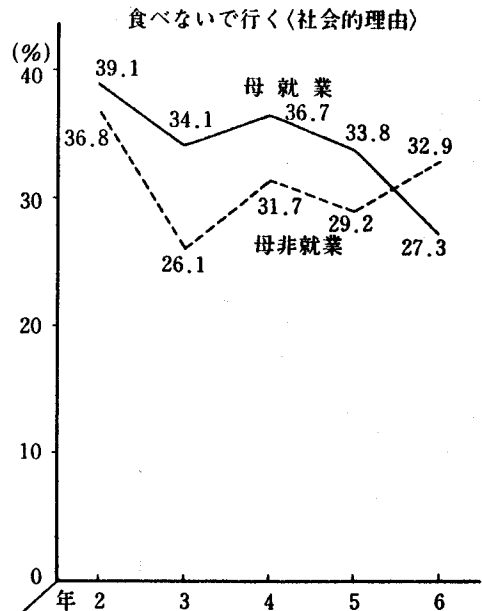
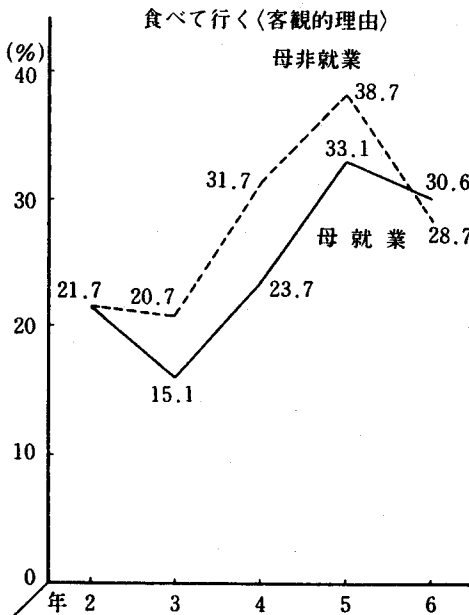
男女別では、4年と5年の処で男女の入れ替りがある。即ち4年生頃までは女子の方が、食べて行くと答えた者が多く、5・6年になると男子の方が多くなってその差も大きく開いていく傾向を示している。

次に②についての理由を3つのカテゴリーに分類してトータルし、グラフ化したのが第4図(1)、(2)である。主観的理由に入れたものは、「おなかがすくから」とか「食べたいから」。客観的理由としては、「力が入らなくなるから」とか「からだによくないから」。社会的理由は「遅刻するから」とか「みんなに迷惑がかかるから」。他律的理由には「食べなさいと言われるから」「食べなければいけないと言われるから」等に分類した。調査対象全体では、

(1)



(2)

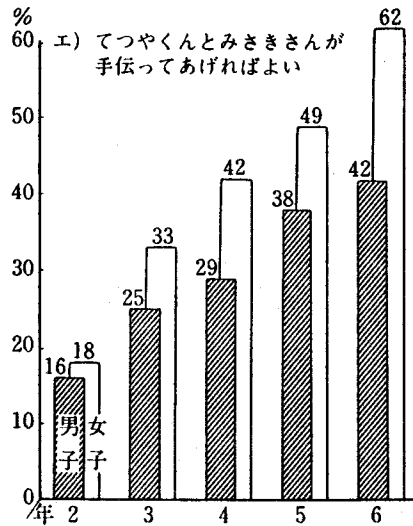


第4図

主観的理由と客観的理由と社会的理由の3つはほぼ3分する結果となった。

学年進行に伴う動きについてみると、三様の動きを示しており、主観的理由は第3学年をピークに減少傾向を辿るのに対し、客観的理由は低学年から高学年にかけて増加する傾向をみせている。社会的理由は学年進行に伴って減少傾向を示している。中でも相対的關係にある主観

的理由と客観的理由とが接近し交差し、移行して行く時期が、4年から6年にかけてあることが分かる。以上のことから、学年進行に伴って食事に対する行動認識は高まって行く傾向があり、主観的認識から客観的認識へ移行して行く実態も明らかになった。この場合の移行期は、3年、4年、5年、年令では、9、10、11才の頃にあり、5年から6年即ち、11、12才にかけて再び両者が交差し移行するきざしを見せている。このような傾向は、衣においても住においても同様の傾向を示している。（第5図参照）



第5図 家族の役割認識(1)

次に男女別にみると、すべての学年において、女子の方が男子よりも客観的理由が高いという結果になっている。また、社会的理由についてみると3年では全く差がなかったものが、4年、5年、6年と学年が進むに従い、差が開いて行き、女子の方がこの影響を強く受けた意識を持つようになり、高学年で「食べて行く」数の減少要因を形づくっていると考察される。

家族構成別では客観的理由に対しては核家族要因が、社会的理由に対しては三世代家族要因が影響を与えているという結果である。

母親の就業別比較においては、母が就業している児童の方が社会的理由に裏付けられた判断をする傾向にあり、客観的理由によって判断する傾向性は、非就業の母親を持つ児童に多いという結果である。しかし、5年から6年にかけては、家族構成や母の就業の有無による要因がさほど児童の意識に影響を与えなくなることが分かる。このことは以前に行った家庭生活認識の調査結果⁵⁾とも一致しており、児童自身の世界観の確立と相俟って移行して行くものと考察される。

住生活 設問7によって考察する。

設問7

てつやくんとみさきさんが部屋をちらつかしています。そしておかあさんに「かたづけなさい。」と注意されたのにかたづけませんでした。このことについて、あなただったらどうしたと思います

か。次の中から1つえらんで○をつけて下さい。

ア) 注意されてすぐにかたづけたと思います。

イ) 気が向いたらかたづけたと思います。

ウ) ちらかっているのは気持ち悪いからすぐにかたづけたと思います。

エ) 自分の部屋だからちらかっているのもよいので、かたづけなと思います。

オ) そのうちお母さんがかたづけてくれると思うので、かたづけなと思います。

カ) その他 ()

選択項目を大別して「……かたづけたと思う」と「……かたづけなと思う」に二分してみると、前者が90.9%，後者が7.2%と、「かたづけたと思う」という意識が圧倒的に多い。また、動機によってみると「注意されて……」「母がかたづけてくれると思うので……」といった依存的、他律的な考え方と「気が向いたら……」「気持ち悪いから……」「自分の部屋だから……」といった自分の意志を優先する考え方とでみると、第3学年に特徴がみられる。即ち、この時期は自律的な理由づけによって行動を決定しようとする事が分かる。ここにも9才の壁と言われるだけあって指導上重要な意味を持つ事を語りかけているように思われる。

なお、極端な他律的動機であるオ)に着目すると、2年生の18人(7.3%)をピークに、6年生では9人(3.2%)と半減している。このことから、現行学習指導要領家庭科5年生で学習する「整理・整とん」は、小学校入学時から、生活指導計画に位置づけて指導する必要がある、その積み重ねの上で5年の教科学習は、科学的裏付けを定着させる必要がある。(第4表参照)

第4表 住 生 活 行 動

項目 性別 学年	ア		イ		ウ		エ		オ		そ の 他		N. A	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
2 (人)	44	57	19	17	38	36	6	2	8	10	3	1	1	2
(%)	37.1	45.6	16.0	13.6	31.9	28.8	5.0	1.6	6.7	8.0	2.5	0.8	0.8	1.6
3 (人)	45	44	29	20	29	42	5	6	2	7	2	6	0	0
(%)	40.3	35.2	25.9	16.0	25.9	33.6	4.5	4.8	1.6	5.6	1.6	4.8	0	0
4 (人)	69	59	25	28	32	28	4	1	3	5	2	3	0	0
(%)	51.1	47.6	18.5	22.6	23.7	22.6	3.0	0.8	2.2	4.0	1.5	2.4	0	0
5 (人)	50	41	27	25	36	47	7	1	6	6	1	0	0	0
(%)	39.4	34.2	21.3	20.8	28.3	39.2	5.5	0.8	4.7	5.0	0.8	0	0	0
6 (人)	66	56	30	30	31	51	3	1	7	2	3	1	0	0
(%)	47.3	39.7	21.4	21.3	22.1	36.2	2.1	0.7	5.0	1.4	2.1	0.7	0	0
全 (人)	274	257	130	120	166	204	25	11	26	30	11	11	1	2
(%)	43.4	40.9	20.5	18.9	26.2	32.1	3.9	1.7	4.1	4.7	1.7	1.7	0.2	0.3

つぎに男女別にみると全体的には女子の方が「かたづけると思う」の割合が若干上廻っているが、有意な差は認められない。また理由づけの中で、特に女子が上廻って差の出たのは

「気持ち悪いから……」で、一方男子がやや高い結果となっているのは「自分の部屋だから……」である。以上のことから、男子にくらべ女子の方がきれい好きな意識傾向にあると言えよう。

家族構成別では、男女においても、学年進行においても特筆すべき要因とはなり得ていない結果であった。一方母親の就業の有無でみると、母親が働いている児童の方が「かたづけようと思う」意識が比較的積極性があると考察される。

(3) 家族の役割行動に対する認識

設問3

おかあさんが食事の後かたづけをしている時、他の人はみんなで楽しそうに、テレビを見ていました。

このことについて、あなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけて下さい。

- ア) おとうさんが手伝ってあげればよいと思います。
- イ) おかあさんが後かたづけをするのがあたり前だと思います。
- ウ) おばあさんが手伝ってあげればよいと思います。
- エ) てつやくんとみさきさんが手伝ってあげればよいと思います。
- オ) みんなで後かたづけをすればよいと思います。
- カ) その他 ()

調査対象者全体について、選択肢別にみると、ア) 1.5% イ) 5.4% ウ) 24.8% エ) 36.1% オ) 29.4%である。この中、調査対象者に近い立場にある人物(てつやくとみさき)の役割行動に対する認識に焦点化して述べる。この項に反応した児童数は前述の比率で見ると最も多く454名に及んでいる。学年進行に伴う動きをみると男女共に上昇傾向を示す(第5図参照)。男女別では各学年とも女子が男子を上廻る結果である。

母親の就業状況別では、母が仕事を持っている児童の中270名が36.9%)が選択し、他方仕事を持っていない母親の場合は、184名(34.3%)という結果で、母親が就業している児童の方が、この項目への積極的な姿勢がうかがえる。

家族構成別では、三世代家族で生活している児童が115名(35.3%)に対して核家族・その他では287名(30.5%)と、前者が高い割合でこの項目に反応を示している。小学校の家庭科で「家族の仕事の分担」という内容を指導する場合、仕事を他に押しつけず自ら進んで家族の一員としての責任を自覚し、実践することもをねらって指導する。今回の調査で、学年間の差が、4年から5年にかけては10%という他学年間に比べて最も大きな伸びを示している事は、5年から設けられているこの教科の学習効果が、大いに貢献していると考えられる。

設問4

① おかあさんは、てつやくんとみさきさんに「しゅく題をやりなさい」と注意しました。おとうさんは楽しそうにテレビを見てわらっていました。

このことについて、あなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけて下さい。

- ア) おとうさんもおかあさんも、子どもに注意しなくてよいと思います。
- イ) 子どもに注意するのはおかあさんの仕事だから、おとうさんは何も言わなくてもよいと思います。
- ウ) おとうさんとおかあさんがいっしょに注意すればよいと思います。

エ) いつもはおかあさんが注意して、何か大きな問題があった時は、おとうさんも注意すればよいと思います。

オ) おとうさんが子どもに注意すればよいと思います。

カ) その他()

② あなたはこの時のおかあさんをどう思いますか。1つえらんで○をつけて下さい。

ア) 大きらい。 イ) きらい。 ウ) どちらとも言えない。

エ) すき。 オ) 大すき。

③ あなたはこの時のおとうさんをどう思いますか。1つえらんで○をつけて下さい。

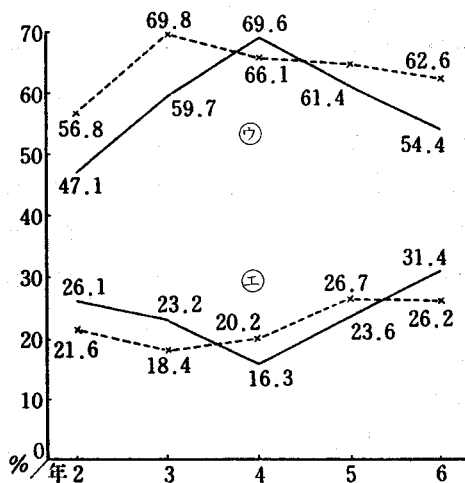
ア) 大きらい。 イ) きらい。 ウ) どちらとも言えない。

エ) すき。 オ) 大すき。

①について、子どものしつけには両親が関わることを期待する「ウ」は61.3%で最も高く、ついで「エ」の23.4%である。全国の調査結果の場合も、「父と母」が48.9%で最も高い。つぎが「家族全員」となっている。父親、母親の役割意識をさぐる目的で「エ」の項目を設けた結果、図に示すように第4学年を曲折点として相対する動きを示す結果となった。(第6図参照) 全国調査では母の分担と考えている比率が、父のそれよりも、はるかに高い率であるのに対し、今回の調査では、「エ」の項目を設けたことで、「イ」の母の分担という意識は低率になっている。5、6年で「エ」の割合が高くなるのは、子どものしつけの役割を自分の実際の生活におおして、より具体的・客観的に捉えることができるようになる表われであろう。

ウ) おとうさんとおかあさんがいっしょに注意すればよい

エ) いつもはおかあさんが注意すればよい



第6図 家族の役割認識(2)

子どものしつけを単独であることを期待する「イ」(母親の仕事)、「オ」(父親の仕事)に対する反応は、何れも2年生が高率で、「イ」が3.7%、「オ」が13.9%であった。特に「オ」に対する意識が、他学年を凌いでいるのは、ドラマの中の父親に対する反感が、そのまま回答

に表われたものと思われる。他のどの学年においても若干その傾向は見られるが、特に2年生に多いのは、映画と自分の生活を切りはなして考えることができず、客観的判断力の未発達現象と考察される。

更に低学年の発達の特徴として自己中心的な傾向が、「ア」（注意しなくてよい）に表われるのではないかと予想したが、前述のように自分と親との一体的な意識が先行する結果となったようである。そうして、この項目への反応が、むしろ6年の児童に多く見受けられるのは、自己啓発の姿勢が育成された表われと考えられよう。

5つの選択肢の動きを3年と2年と比較すると、両学年間にはかなりの違いがあり、むしろ、3年4年が近い傾向を示している。従って、2年から3年4年にかけての移行過程で大きな変化があるとみるべきであろう。そこには親との一体感を基本とする段階から「望ましい自己実現」への認識の芽生えがあると考えられる。

第5図によって男女差をみると、女子の方は3学年に、男子の方は4学年に1つの屈折の時期があり、女子の方が早く社会通念としての性役割意識が育つもののようである。

家族構成のちがいや母親の就業の有無による差は殆ど見受けられない。設問3と比べて意外であるが、3の場合のように、直接時間や労力と関わる事柄でない事によるとと思われる。

②、③について 大きらいを1点、きらいを2点、どちらとも言えないを3点、すきを4点、大好きを5点として点数化し、それぞれの平均値と標準偏差を求めた結果が、第5表である。

第5表 設問4の点数化した平均値と標準偏差

問 題 性 別 事 項 学 年	4 — ②						4 — ③					
	全 体		男 子		女 子		全 体		男 子		女 子	
	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D
2	2.83	1.03	2.61	1.1	3.04	0.92	2.64	0.90	2.71	0.99	2.58	0.82
3	3.07	0.81	3.05	0.74	2.96	1.04	2.69	0.88	2.77	0.95	2.61	0.65
4	3.07	0.68	2.96	0.61	3.18	0.73	2.75	0.86	2.64	0.87	2.87	0.84
5	3.00	0.74	2.94	0.72	3.06	0.75	2.60	0.81	2.67	0.82	2.53	0.79
6	2.93	0.70	2.93	0.68	2.93	0.72	2.74	0.80	2.84	0.84	2.64	0.74
全 学 年	2.98	0.80	2.90	0.79	3.03	0.84	2.69	0.85	2.73	0.90	2.65	0.81

全体的にみて学年が進むにつれて標準偏差は小さい値を示している。男女別では母親に対する評価は女子の方が高く、父親に対しては男子がよい評価をしている。クロス集計の結果では、「おとうさんもおかあさんも注意しなくてよい」と答えた者の情緒的認識（すき・きらい）がきびしく、価値的にも情緒的にも否定的であり、この傾向は低学年に著しい。

母親への情緒的認識は、「二人で注意すれば……」と答えた者が高く、父親に対しては、父への期待の大きい者がきびしく評価している。

設問8

①みさきさんが、ちゃんと部屋をかたづけるといふやくそくを守らなかったの、おかあさんは、みさきさんの大切な人形をどこかへ持って行ってしまいました。このことについてあなたはどうか思

いますか。思ったことを自由に書いてください。

()

②あなたはこういうおかあさんを好きですか、きらいですか。1つえらんで○をつけてください。

ア) 大きらい。

イ) きらい。

ウ) どちらとも言えない。

エ) すき。

オ) 大すき。

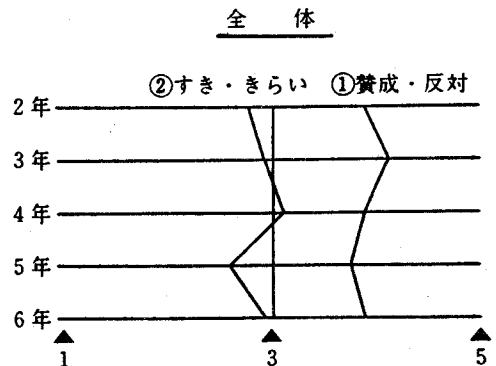
①の記述内容を みさきが悪い（母親が正しい）を賛成として5点。みさきがかわいそう（母親が悪い）を1点。どちらとも言えないを3点。条件づき賛成を4点。条件づき反対を2点として、5つのカテゴリーに分類し、点数化し、集計を行った。（第6表参照）

第6表 設問8の点数化した平均値と標準偏差

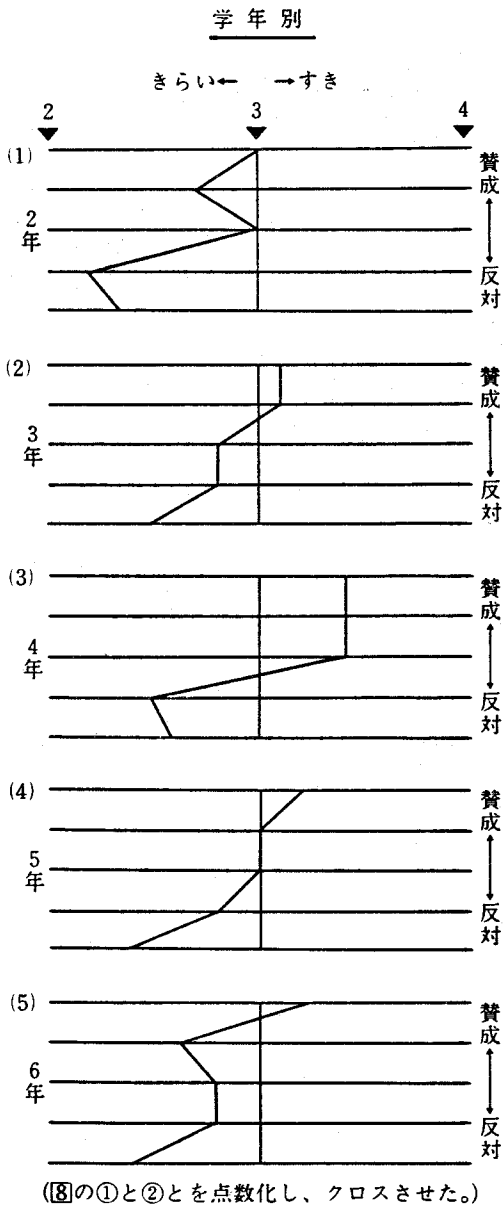
問 題 事 項 学 年	8 — ①						8 — ②					
	全 体		男 子		女 子		全 体		男 子		女 子	
	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D	\bar{x}	S. D
2	3.92	1.68	3.95	1.70	3.69	2.05	2.80	1.01	2.70	0.98	2.88	1.03
3	4.14	1.41	4.20	1.43	4.08	1.50	2.97	0.89	2.94	0.79	3.00	0.97
4	3.88	1.52	3.81	1.60	3.96	1.42	3.15	0.94	3.02	0.95	3.30	0.91
5	3.74	1.66	3.74	1.73	3.74	1.43	2.58	1.33	2.98	1.00	2.93	0.93
6	3.92	1.51	3.96	1.86	3.89	1.43	2.95	0.84	2.83	0.82	3.06	0.85
全 学 年	3.92	1.56	3.93	1.62	3.91	1.50	2.97	0.94	2.90	0.92	3.04	0.95

3年で高かった評価は4年、5年で下がり、6年になるとまた高まる。ここで重要なのは、この場面に登場する人形の意味である。みさきにとっては毎晩抱いて寝るほどの精神世界の大切な住人であって、言いかえれば自我の象徴的存在である。そうしてこの意味をどう捉えるかによって反応が影響を受けると思うのである。このように考えると、3年生と4年生の間に価値的認識の移行があると考えられる。3年生では、まだ親との一体的認識から脱脚できず自我の確立が不十分である為、母親の行動を割合素直に受け入れているのに対し、4年になると除々に、自分の世界が確立してくることによって、そこに入り込もうとする母親の行為を批判的に見るようになってくるのであろう。5年では一層その傾向は強まるが、6年では両者の行為を客観的に判断する発達過程に入ってくると思われる。

②では設問4の②、③と同様に点数化し、平均点と標準偏差を求めた。（第6表右側参照）



第7図 家族の役割認識(3)



第8図

①と②について全体的に捉えてみた。(第7図参照)これによってみると、4年生で①と②が接近しており、母親の行為に対する価値認識が比較的低いの、情緒的認識は高くなっている。4年生段階では両者の認識が分化していると見るべきであろうか。この点について①と②のクロス集計結果を学年ごとに図に表わして見た。(第8図(1)から(5))

2年生は①での賛成派から反対派まですべて「きらい」寄りである。特に反対派の片寄りが大である。前述設問4の傾向と同様の結果である。

3年になると賛成派は「すき」の方に、反対派は「きらい」の方に反応する傾向が見られ、価値認識が情緒的認識の裏付けとなってくることがわかる。

4年生に着目すると、3年生と国様の傾向が一段と明確に表われる。そのゆれ巾はかなり大きく(0.9)、両者の相関が最も高い結果である。5、6年は、グラフの表われ方としては、逆転しているかのように見受けられるが、内実的には自我のめざめによって、母親の行為を客観的に評価しての結果と考察される。

お わ り に

研究仮説に従って、研究結果の考察を行った中から、小学校の家庭科教育に対する課題を整理してみると、

1. 家族の間柄に対する児童の事実認識は、学年進行と共に直線的に高まって行くこと。また、この認識発達に影響を与える属性要因としては、子どもをとりまく家族

構成の相異があげられる。それにくらべて母親の就業の有無は余り影響が無い。

2. 生活行動や役割認識においては、3年から4年にかけての時期に質的な転換が見受けられる。このことから3年頃から、民主的な生活規範にもとづき、家族の一員としての役割認識に立った実践活動を促す教育が、段階的に行われる必要があると思われる。

男女別傾向は、どの設問においてもはっきりした形で出て来ており、特に生活行動・役割行

動に対する考え方において顕著である。

一般的に男子より女子の方が家庭生活に対する認識の発達が早いし、家族のあり方に対する民主的な考え方が進んでいる。男子は自分から進んでというよりは他人まかせの傾向が強く表われている。

男女の差は設問によって差が大であったりさほどでなかったりはしているが、低学年から差があることは明らかで、男女の家庭における教育のあり方や、子ども自身の経験のちがいがから来る諸々の社会的要因が、子どもの認識発達の性差に早くから影響を及ぼしているように思われる。

3. 家庭科教育との関係

今回の調査では衣生活行動認識の面で、家庭科教育の影響が顕著にみられた。5年生の教材に「ボタンつけ」、6年生の教材の「ほころびなおし」があって学習されていることが、影響したと思われる結果が明らかに考察された。生活技能が身につく事家庭生活に対する認識を変えて行くものであることを、実証した結果とみることができよう。

また、家庭生活の民主化を標ぼうして出発した家庭科であるから、前述したような男女による意識の隔差を無くする方向で、低学年から、設置が望まれるところである。東京工業大学教授の坂元昂氏も、低学年の総合学習検討課題として、「家庭科は高学年にしか置かれていないが、その内容は生活体験そのものに深い関係をもっているので、他教科と共に、積極的に参画することが望ましい」⁷⁾と述べている。

更に1980年7月には、コペンハーゲンにおいて「国連婦人の十年1980年世界会議」が開催され、その際、我が国は「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」に署名した。このことが導火線となり、それまでくすぶり続けて来た、家庭科男女共修問題は世論として燃えあがり、それに応えて文部省でも、まえがきに述べたような対応を迫られた怪偉がある。

以上のように家庭科教育をめぐる諸問題が山積している時であるから、こども不在の教育改革にならないことを願って、本論稿のまとめとし報告する次第である。

最後に調査に当り県小学校家庭科研究会の役員並びに対象校の先生方、児童の皆さんの御協力をいただきました事に対し、心から感謝致します。また、調査の実施とデーター処理に協力頂いた昭和60年度家政科専攻生の住藤真理子、野辺地純子、早川泉、吉田由紀子の諸氏に感謝します。

(1986・5、日本家政学会第38回大会で口答発表)

- 1) 岩崎恭枝他5名「フィルム視聴よりとらえた家族関係の認識とその発達(第1報)、(第2報)、(第3報)」日本家庭科教育学会誌25巻1号
- 2) 宮川満「〴〵家庭生活、認識の展開」月刊家庭科教育47巻11号
- 3) 金田利子他5名「子どもの認識の発達と家庭科教育(第1報)、(第2報)」日本家庭科教育学会誌24巻1号
- 4) 日本家庭科教育学会東北地区会編「これからの家庭生活技術」1986・5、101頁
- 5) 日本家庭科教育学会東北地区会編「現代のこどもは、家庭生活をどう考えているか。」1984・5、25頁
- 6) 日本家庭科教育学会編「現代のこどもたちは家庭生活をどう見ているか」1984・5、113頁
- 7) 坂元昂「発達課題と小学校低学年の教育」月刊初等教育資料 No.458.昭59、96頁

(参考)

本調査4～6年生用

しつ問用紙

____年____組 名前_____

<あなたの家族についてのしつ問です。>

- あなたといっしょに住んでいる人に○をつけ、きょうだいがいる人は、その人数を()の中に入れてください。

(れい) そ父, そ母, (父), (母), 兄(1), 姉(1), 妹(), 弟(), その他
 そ父, そ母, 父, 母, 兄(), 姉(), 妹(), 弟(), その他

- あなたの家族は、どんな仕事をしていますか。

(れい) 父 学校の先生, 医者, お店をやっている など
 母 家にいる, 学校の先生, かんごふ など

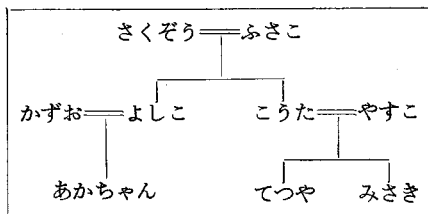
父 _____

母 _____

その他() _____

<今見たえい画についてのしつ問です。>

- ① 下の図を見て、次を書いてある文が正しかったら○, まちがっていたら×をつけてください。



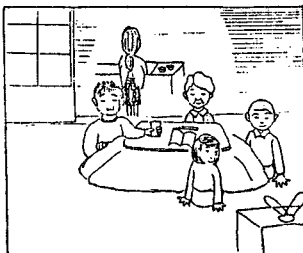
(○=△ ○と△はふうふ
 □は○と△の子どもであるこ
 とを表す。)

- ア) みさきさんとあかちゃんは、きょうだいです。
 イ) てつやくんはやすこさんの子どもです。
 ウ) こうたさんとやすこさんは、きょうだいです。
 エ) みさきさんは、ふさこさんのまごです。
 オ) あかちゃんは、てつやくんのいとこです。
 カ) さくぞうさんは、かずおさんのおじさんです。
 キ) こうたさんは、あかちゃんのおじさんです。

- ② おばあさんがおかあさんにだまって、てつやくんにおこづかいをあげました。このことについて、あなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけてください。

- ア) てつやくんにほしいと言われてあげたのだから、おばあさんのしたことはよいことです。
 イ) おばあさんが、あげたくてあげたのだからいいことです。
 ウ) あげてしまったものは、仕方がないです。
 エ) おこづかいをあげるのはおかあさんのやく目だから、おばあさんがおこづかいをあげるのはよくないことです。
 オ) 毎月の決められたおこづかいの他に、おこづかいをあげるのはよくないことです。
 カ) その他 ()

- ⑧ おかあさんが食事の後かたづけをしている時、他の人はみんなで楽しそうにテレビを見ていました。このことについて、あなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけてください。



- ア) おとうさんが手つだってあげればよいと思います。
 イ) おかあさんが後かたづけをするのがあたり前だと思います。
 ウ) おばあさんが手つだってあげればよいと思います。
 エ) てつやくんとみさきさんが手つだってあげればよいと思います。
 オ) みんなで後かたづけをすればよいと思います。
 カ) その他 ()

- ④ ①おかあさんは、てつやくんとみさきさんに「しゅく題をやりなさい。」と注意しました。おとうさんは楽しそうにテレビを見てわらっていました。このことについて、あなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけてください。

ア) おとうさんもおかあさんも、子どもに注意しなくてよいと思います。

イ) 子どもに注意するのはおかあさんの仕事だから、おとうさんは何も言わなくてもよいと思います。

ウ) おとうさんとおかあさんが、いっしょに注意すればよいと思います。

エ) いつもはおかあさんが注意して、何か大きな問題があった時は、おとうさんも注意すればよいと思います。

オ) おとうさんが子どもに注意すればよいと思います。

カ) その他 ()

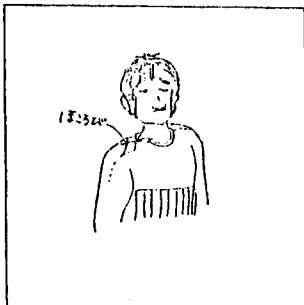
- ②あなたはこの時のおかあさんをどう思いますか。1つえらんで○をつけてください。

ア) 大きい イ) きれい ウ) どちらとも言えない エ) すき オ) 大すき

- ③あなたはこの時のおとうさんをどう思いますか。1つえらんで○をつけてください。

ア) 大きい イ) きれい ウ) どちらとも言えない エ) すき オ) 大すき

- ⑤ おとうさんが、少しほろびたシャツをそのまま着ているところがありました。このことについてあなたはどのように思いますか。次の中から1つえらんで○をつけてください。



ア) 上に服を着てしまえば、ほろびているのはわからなくなるから、ほろびたままでよいと思います。

イ) ほろびていても着ることができるから、ほろびたままでよいと思います。

ウ) ほろびてしまったのだから、それをすてて新しいシャツを買えばよいと思います。

エ) ほろびたままではいけないから、すぐに直せばよいと思います。

オ) その他 ()

- ⑥ ①てつやくんとみさきさんが朝ねぼうして、朝ごはんを食べないで学校に行くところがありました。このことについて、もしあなたがたったらどうしたと思いますか。1つえらんで○をつけてください。

ア) 食べて行く イ) 食べないで行く

- ②それはどうしてですか。

()

- ③朝ごはんを食べないことについて、ふだんあなた自身はどう考えていますか。

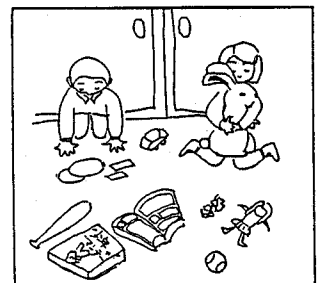
()

- ⑦ てつやくんとみさきさんが部屋をちらかしています。そしておかあさんに「かたづけなさい。」と注意されたのに、かたづけませんでした。このことについて、あなたがたったらどうしたと思いますか。次の中から1つえらんで○をつけてください。

ア) 注意されてすぐにかたづけたと思います。

イ) 気が向いたらかたづけると思います。

ウ) ちらかっているのは気持ち悪いから、すぐにかたづけたと思います。



エ) 自分の部屋だからちらかっていてもよいので、かたづけなと思います。

オ) そのうちおかあさんがかたづけてくれると思うので、かたづけなと思います。

カ) その他 ()

- ⑧ ①みさきさんがちゃんと部屋をかたづけるというやくそくを守らなかったで、おかあさんは、みさきさんの大切な人形をどこかへ持って行ってしまいました。このことについてあなたは どう 思いますか。思ったことを自由に書いてください。

()

- ②あなたは とういふおかあさんを すきですか、きらいですか。1つえらんで○をつけてください。

ア) 大きらい イ) きらい ウ) どちらとも言えない エ) すき オ) 大すき